Tulips University of Tsukuba Repository

アレクサンドリアのクレメンス『テオドトスからの抜粋』　全訳

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究
巻	68
ページ	31-62
発行年	2015-09-30
その他のタイトル	Clemente Alessandrino, Passi selezionati da Teodoto (traduzione giapponese)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00129326

アレクサンドリアのクレメンス『テオドトスからの抜粋』
―全訳―

秋　山　　学

序.

初期ギリシア教父の一人，アレクサンドリアのクレメンス（150－215）の著作をめぐり，筆者は本学の紀要を借りてその全訳作業を進めてきた．すでに『プロトレプティコス』（「ギリシア人への勧告」；全１巻），『パイダゴーゴス』（「訓導者」；全３巻），および『ストロマテイス』（「綴織」；全８巻），そして小品『救われる富者とは誰であるか』に関しては訳出を終えている[1]．このほかに伝わるクレメンスの著作としては『テオドトスからの抜粋』（*Excerpta ex Theodoto*），および『預言書撰文集』（*Eclogae propheticae*）が残っている．これらをすべて訳し終えたとき，他の著作家によって断片的に引用されているもの[2]を除き，クレメンスの現存著作がすべて邦訳されることになる．

本稿は，この目的を果たすべく起稿したものであり，再び本学の紀要である『文藝言語紀要』を借りて『預言者撰文集』[3]とともに『テオドトスからの抜粋』を訳出する．前者が，総じて旧約聖書の諸節を基に観想的解釈を展開した小品であり，洗礼の秘跡に始まって，クレメンス神学の根幹をなす「覚知」（gnōsis）の獲得と，終末論的展望の中での霊魂の神化に至る階梯を叙述したものであるのに対し，後者は，ウァレンティノス派グノーシス主義者の一人であるテオドトスの思想を探るために，覚書風に記された著作であり，主として古代グノーシス主義研究に携わる研究者たちから重要視されてきた．それらグノーシス主義研究書の中では，スペイン語で記されたアントニオ・オルベによるものが浩瀚である[4]．なお本著作の題目に関して，副題を含めて正確に訳出するなら（「テオドトスからの，すなわちウァレンティノスの時代における＜東方派＞と呼ばれる一派の教説からの抜粋」となる．ここからテオドトスが，「東方派」と呼ばれるウァレンティノス派グノーシス主義者たちの一派に属していたことが明らかである．

本著作『テオドトスからの抜粋』では，テオドトスらグノーシス主義者によ

る著作からの引用が頻出するものの，クレメンスがその引用に依拠しつつ自身の批判的注記を加えたと思われる箇所との差異が明確でないため，研究者たちは，テオドトスからの引用部分と，クレメンスの見解が提示された箇所との腑分けを行うのが慣例となってきた．本稿では，主としてサニャールが仏語対訳版で提示している見解を参照した（cf. F. Sagnard, o.p., *Clément d'Alexandrie : Extraits de Théodote,* texte grec, introduction, traduction et notes, Nouveau tirage, Paris 1970; SC no.23）．サニャールによる見解は，ディベリウス（O. Dibelius, 1908）やカゼイ（R. P. Casey, 1934）などの先行研究を踏まえたものである．ただし細部に関しては，腑分けが必ずしも確定的でない場合もあり，本稿では原則として，大枠においてテオドトスに発する部分とクレメンスによる注記とを区別したに過ぎない．本稿では以下，全86節より成る本作品のうち，4－5，8－9，18－20，27節をクレメンスの注記と判断した．

邦訳に際し，底本としてはシュテーリン（O. Stählin，1868－1949）の校訂になる校訂版テキスト（*Stromata Buch VII und VIII ; Excerpta ex Theodoto ; Eclogae Propheticae ; Quis dives salvetur ; Fragmente* / Clemens Alexandrinus ; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig: Hinrichs, 1909; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte; Clemens Alexandrinus, Bd. 3）を用いた．フリュヒテル（L. Früchtel）らの改訂になる1970年の第２版については参照していないが，典拠箇所指示の充実が図られたものと思われるので，教文館版（「キリスト教教父著作集」）刊行のための見直し作業の際に活用したい．近代語訳として，上掲したサニャールによるフランス語訳を参照し，あわせて便宜のために付した内容見出しに関しても，同書を参考にした．

本著作を収録する写本は，『ストロマテイス』および『預言書撰文集』と同じくフィレンツェ写本（“L”: Laurentianus V 3）であり，本作品に関して同写本からの写本は伝えられておらず，依拠しうるのはフィレンツェ本一本のみということになる．

『テオドトスからの抜粋』
（「ウァレンティノスの時代における＜東方派＞と呼ばれる一派の教説からの抜粋」）

第１部　抜粋１－28

1.1）イエスは言う．「父よ，わたしはあなたの手に自らの霊を委ねる」（ﾙｶ23,46）．彼は言う．智慧が，御言葉に対し肉的なものとして提供したのは霊的な種子であり，救い主はこれを帯びて到来した．2）それゆえ受難の際にイエスは智慧を父に委ねたが，それはイエスが智慧を父から受け取り，この世において，智慧を奪い取ることのできる者どもによって妨げられることのないようにするためであった．かくしてすべての霊的な種子は，選ばれた者たちを，あらかじめ告げる声でもって委ねるのである．

3）さてわれわれは，選ばれた種子のことを「ロゴスによって燃やされる火花」「眼の瞳」「芥子だね」，また「分かたれているように思われる類をも信のうちに統合するパンだね」と呼ぶ．2.1）しかるにウァレンティノス派の人々は，魂的身体が形成される際，選ばれた霊魂が眠りのうちにある間に，御言葉・ロゴスにより，その中に男性の種子が挿入されるのだと言う．この種子こそ天使的なものの流出であって，それは欠けたるところのないようにするためである．2）そしてこの種子が，分裂するであろうと思われるもの，すなわち霊魂と肉体とを一つにしつつ，発酵したのであるが，それらは智慧（Sophia）によって，個々にも生み出された．しかるに，アダムの眠りとは霊魂の忘却であって，霊的な種子が解体しないように維持した．この霊的な種子とは，救い主が霊魂のうちに備えたものである．この種子とは，男性的・天使的なるものの流出である．3.1）かくして救い主は，来たりて霊魂を眠りから覚まし，火打石に火を灯した．というのも主の言葉は力である．それ故に主はこう語る．＜あなた方の光を，人々の前で輝かせよ＞（ﾏﾀｲ5,16）．2）そして復活の後には，使徒たちに息吹を吹きかけた．こうして，ちょうど灰色の土くれを吹き飛ばして分離し，火打石に火を灯したという具合であった．

4.1）主は多大な謙遜さをもって，天使としてではなく，人間としてその姿を目にされた．そして使徒たちに，山の上で栄光のうちにその姿を目にされた際，自らを通してではなく，教会を通じて自らの姿を示すというやり方を採った．その教会とは＜選び抜かれた類＞（1ﾍﾟﾄﾛ2,9）である．これは主が，自ら

の歩みは肉からの脱出の後であるということを教会が学ばんがためであった．2）というのも主自身が天上の光であり，肉のうちに顕現した光，この地上において目にされた光であって，それは天上の姿に遅れるものではなく，天上よりこの世に移された姿によって打ち砕かれることもなく，場所を場所から移し変えて，ある場所は受け取るがある場所を後にするような光でもない．むしろあらゆる場所に遍在し，父の許におけると同じように，この世にあっても輝く光である．なぜなら，主は父の力だからである．3）とりわけ不可欠なのは，次のような救い主の言葉が満たされることであり，主はその言葉をこう語っている．＜ここに立っている人々の中に，人の子が栄光のうちにやって来るのを見るまでは，決して死を味わうことのない者がいる＞（ﾏﾀｲ16,28）．こうしてペトロ，ヤコブ，そしてヨハネは，主のこの姿を目にしてから死の眠りに就いたのである．

5.1）ではいったいどうして，輝ける光景を目にしても彼らは打倒されなかったのに，その声を聞いて地に倒れたのであろうか．それは，耳の方が目よりも信用できず，予想に反した声の方がより驚愕させるものだからである．2）しかるに洗礼者のヨハネは，この声を聞いても驚かなかった．あたかもそのような声に慣れ親しんだ霊のうちに聞いたかのようであった．ちょうど，人が一人でいるときには，物音を聞いて驚愕するのと同じようである．それゆえ救い主は彼らにこう述べている．＜あなた方が目にしたことを，誰にも話してはならない＞（ﾏﾀｲ17,9）．3）しかしながら彼らは，肉的な眼でもってこの光を見たわけではない（というのもこの光，この肉と生まれを同じくし，親近性を有するものではない）．むしろ，救い主の力と意向とが，この肉に，見ることを可能にさせた限りにおいてであった．とりわけ，霊魂が見た限りにおいて，それを肉が共有すべく，肉に織り込むことによって肉に分かち与えたのである．4）しかるに＜あなた方は誰にも話してはならない＞というのは，主がそれであるところの事柄を彼らが思惟することなく，主に自らの両の手を委ねることを差し控え，経綸が不完全なものとなり，死が主から遠ざかって，彼らが永遠に虚しく試みるというようなことのないようにするためである．5）そしてさらに，山上での声は，すでに理解力のある選ばれた人々に対して起こったのであり，それゆえに彼らが驚いたことは，信ずるに足る記事が証言している通りである．しかるにヨルダン川で聞こえた声は，将来信じるであろう人々に対して起こったものである．それ故このヨルダン川での声は，律法の教師たちの教育の場に座を占めている人々には，まったく関心の向かないことだったのであ

る．

6.1）＜初めに御言葉があり，御言葉は神に向かってあり，御言葉は神であった＞（ﾖﾊﾈ1,1）という一節の意味について，ウァレンティノス派の人々は次のように理解している．彼らは，ここで「初め」というのは「独り子」ということであり，この方が「神」とも名づけられていて，それは続く部分で，彼のことを次のように，直截に「神」と呼んでいることからも明らかである．＜「在る方」である独り子である神，この方が父の懐に向け，自ら説き明かして見せたのである＞(ﾖﾊﾈ1,18)．3)一方福音記者は，初めにあった御言葉が，独り子，知性（ヌース），真理のうちにあり，この方をキリスト，御言葉，生命として告げているのである．ここから福音記者が，彼のことを「神」と呼ぶのも相応しいことである．なぜならこの方は神である知性のうちにあるからである．4）＜彼のうちに成ったもの，それが生命であった＞（ﾖﾊﾈ1,3以下），ここで彼とは御言葉であり，生命とは配偶者である．それ故主は＜わたしは生命である＞(ﾖﾊﾈ11,25；14,6）とも述べているのである．

7.1）かくして父は，知られざる者であったが，世々によって，自らの考慮（enthymēsis）を通じて知られることを欲した．そしてあたかも自らを知っていたかの如くに，覚知のうちにある覚知の霊を，独り子として生み出した．こうして覚知による者，すなわち父の考慮に由来する者が，グノーシスとして生まれ出た．これがすなわち御子である．なぜなら＜子を通じて父は知られる＞(ﾏﾀｲ11,27）からである．2）しかるに愛の霊は覚知の霊と混ぜ合わされ，そのあり方はちょうど，父と子が混じり，考慮と真理が混ざるのと同様であった．霊は真理から生まれ出たが，それはちょうど覚知が考慮から生まれ出るのと同様であった．3）そして＜独り子である御子が父の懐に向けて＞（ﾖﾊﾈ1,18）留まり，この考慮を世々に対して覚知を通じて解き明かした．それはあたかも，彼が父の懐から生み出されたかの如くであった．だがこの地上で目にされた者は，もはや「独り子」ではなく，むしろ「独り子としての者」であった．これは使徒の名づける所による（ﾖﾊﾈ1,14)．＜その栄光は独り子としての者のそれ＞だったからである．なぜなら，一者にして同じイエスが，被造物の中では＜初穂＞であり，充溢にあっては＜独り子＞なのである．しかるに彼自らはこのような者であるため，どのような場所にでも赴くことができる．4）そして降下する者は，留まる者から決して分かたれることがない．なぜなら使徒がこう述べているからである．＜昇った方は，降下した方と同一である＞(ｴﾌｪｿ4,10)．5）一方彼らは，創造者とは御独り子の似像であると言う．それ故，業とは似

像から切り離されたものであり，ここから主もまた，蘇らせた死者たちを，霊的な復活の似像とした．彼らを肉において腐敗しない者としてではなく，むしろ死んだと同時に蘇らせたのである．

8.1）しかるにわれわれは，神のうちにあって同一性の下にある御言葉を神と言う．彼はまた＜神のふところのうちにある＞（ﾖﾊﾈ1,18）と語られ，離れることなく，分かたれることなく，一なる神なのである．2）＜すべてはこの方によって成った＞（ﾖﾊﾈ1,3）．これは同一性のうちにある御言葉の，絶えることのない働きによるものであり，「すべて」とは霊的なもの，思惟されるもの，感覚されるもののすべてである．＜この方が父の懐を解き明かして見せたのである＞（ﾖﾊﾈ1,18）．この方とは救い主であり，＜あらゆる被造物の中での初穂＞（ｺﾛｻｲ1,15）である．3）しかるに同一性のうちにある御独り子は，その許から離れることのない働きによって救い主が働いているのであるが，この方こそ，以前には闇と無知のうちにあった教会の＜光＞（ﾖﾊﾈ1,4）である．4）＜そして闇は彼に打ち勝たなかった＞（ﾖﾊﾈ1,5）．ここで「闇」とは対抗して立つ勢力のことであり，人々の中で残りの者たちは，彼を知ることがなく，死は彼を捕えることがなかった．

9.1）信仰は一様ではなく，多様なものである．実際，救い主がこう述べている．＜あなたの信仰の通りになるように＞（ﾏﾀｲ9,29）．ここから，招きに属す人々は，反キリストが現れる際に惑わされるであろうと語られる（ﾏﾀｲ24,24）．しかしながら選び抜かれた人々に関してこれはあり得ない．それ故主はこう述べる．＜そしてもし可能であれば，わたしの選り抜きの人々をも惑わそうとする＞．2）さらに，主が＜あなた方は，わたしの父の家から出るがよい＞（ﾖﾊﾈ2,16）と述べる際，これは選ばれた人々に対して語られているのである．また，不在から帰宅し，財産を消尽し尽してしまった息子のために，肥えた仔牛を屠った父親のたとえ話において，この話は招きのことを述べているのであり，それは王が，結婚式の宴の場に，通りにいた人々を招いたたとえ話においても同様である．3）実に，すべての者たちが等しく招かれている（なぜなら＜神は正しい者にも不正な者にも雨を降らせ，太陽を万人のために昇らせる＞【ﾏﾀｲ5,45】からである）．だがより信仰の篤き者たちが選ばれるのであり，これらの者たちにはこう語られる．＜わたしの父を見た者は，子を措いて他に誰もいない＞（ﾖﾊﾈ6,46），あるいは＜あなた方は世の光である＞（ﾏﾀｲ5,14），さらには＜聖なる父よ，あなたの名において，彼らを聖化して下さ

い＞（ﾖﾊﾈ17,11；17,17）.

10.1）しかしながら，霊的なものも思惟的なものも，大天使たちも最初に創られた者たちも，決して形なきものでも，形相を欠いたものでも，形態を持たぬものでもなく，むしろ固有の形を有し，霊的なものすべての卓越の許に，身体をも有している．それはちょうど，最初に創られた者たちが，自分たちの許にある諸実体の卓越性に基づいてそうであるのと同様である．2)というのも，総じて生まれたものは，非実体的なものではないが，その一方で，形と体を有するこの世の物体と似ているわけでもない．3）なぜならこの世におけるものは，男性的および女性的であり，それらとは異なるものだからである．しかるにあの世にあっては，独り子にして，優れて思惟的なる者が，固有の形相，固有の実体に依拠する．その実体とは特別に純粋であり最も権威に満ちたものであって，止むことなく父の力を享受する者である．一方最初に生まれた者たちは，たとえ数において異なり，各々画され規定されているにしても，諸事物の類似性が，一致・等質性・類似性を表している．4）なぜならあるものには7以上，あるものには7以下が提供されるが，決して彼らに進捗が欠けることがなく，原初より，最初の誕生とともに，神から御子を通じて完全なるものを受け取るからである．5）そしてあるものは＜独り子＞（ﾖﾊﾈ1,14），＜初穂＞（ｺﾛｻｲ1,15）として＜近づき難き光＞（1ﾃﾓﾃ6,16），また＜目が見たこともなく，耳が聞いたこともなく，人の心に昇ったこともないもの＞（1ｺﾘﾝﾄ2,9）と呼ばれ，最初に生まれた者たちの中にも人間たちの中にも，そのような者は存在しないであろう．6）だがある者たちは＜永遠に父の御顔を仰ぎ見る＞（ﾏﾀｲ18,10）者たちである．その際父の御顔とは御子のことであり，この御子を通して父が知られるのである．しかるに見る者と見られるものは，形態を有さず身体を伴わないでいることは不可能である．けれども彼らは，感覚的な眼ではなく，父が提供するような思惟的な眼で見るのである．

11.1）かくして，主が＜これらの小さき者たちの一人として軽んじることのないようにせよ．まことにわたしはあなた方に言う．彼らの天使たちは，父の御顔を常に見ているのである＞（ﾏﾀｲ18,10）．この「御顔」というのは，いわば予型（prokentēma）のようなものであり，選ばれた者たちは完全な階梯を踏み，次のような者たちとなるであろう．＜心において浄らかな者たちは幸いである．彼らは神を見るであろう＞．2）ところで，形を持たない方の顔とはいったいどのようなものなのであろうか．実に使徒は，天上的な諸身体とは美

しく思惟的なものであるということを知っている．それらの名についても，もしそれらが形状，すなわち形と身体によって描けるものでないとすれば，どうしてそれが様々に異なっていると使徒は述べるのであろうか．＜天上の者，地上の者，天使たち，大天使たちそれぞれの栄光は，互いに異なっている＞（1ｺﾘﾝﾄ15,40）．3）ちょうど，地上的な身体に比較してみるならば，例えば星の実体は，非実体的で姿を持たないが，御子の身体に比較してみるならば，その実体は限定された感覚的なものである．父と比較してみた場合の御子も，ちょうどそれと同様である．4）そして霊的な諸存在の各々も，固有の力と固有の経綸を有している．そのあり方はちょうど，最初に創造された者たちが，同一の場所に集められるや，完全な姿を摂ると同様に，その礼拝に関しても，共通にして分かたれざるものとなるのである．

12.1）かくして最初に創られた者たちは，御子と自分たち，そしてより下位にあるものどもを目にした．それはちょうど，大天使たちが最初に創られた者たちを目にしたのと同様である．しかるに御子は，父を見ることの発端である（ﾖﾊﾈ6,46）．それは御子が，父の御顔と言われることによる．2）そして天使たちは，思惟的な火にして思惟的な霊であって，その本質に関して浄化されているが，思惟的な光は，完全に浄化された恣意的な火からの最大の歩みなのであって，かのペトロは＜それを天使たちも見て確かめたいと思っている＞（1ﾍﾟﾄﾛ1,12）と言っている．3）しかるに御子は，これよりもさらに浄らかであり，＜近づき難い光＞（1ﾃﾓﾃ6,16）にして＜神の力＞（ﾛｰﾏ1,16）である．そして使徒によれば，＜われわれは傷や汚れのない尊い血によって贖われた＞（1ﾍﾟﾄﾛ1,19）のである．この方の＜衣は光のように輝き，その御顔は太陽のように光を放った＞（ﾏﾀｲ17,2）のであり，目を向けることさえ容易ではなかったのである．

13.1）この方こそ＜天上のパン＞（ﾖﾊﾈ6,51）であり，生命を与える＜霊的な糧＞（1ｺﾘﾝﾄ10,3）であって，これは食糧に関しても覚知に関しても該当する．このパンとは＜人々の光＞（ﾖﾊﾈ1,4）であるが，この「人々」が教会であることは言うまでもない．2）かくして，天上のパンを食した者は死んだが，霊の真実なるパンを食す者は，死ぬことはないであろう．3）父によって，食べたいと欲する者たちに与えられる生けるパンとは，御子のことである．4）主はこう述べる．＜わたしが与えるパンとは，わたしの肉である＞（ﾖﾊﾈ6,51）．すなわち，このパンによって，聖餐を通じて肉が養われるという意味か，もしくは，こちらのほうがより妥当であろうが，肉とはキリストの身体のことであ

り，このキリストの身体とは＜教会であり＞（ｺﾛｻｲ1,24），＜天上のパン＞（ﾖﾊﾈ6,51）であって，これは祝された集会である．5）だがおそらくこれは，その基体に関して，選ばれた者となった者たちが同一の本質になるものであることについて，また同一なる目的のもとに形成された共同体であることについて，これは述べられているのである．

14.1）悪霊のようなもの（daimonia）は＜非物体的である＞と言われる．これは身体を有しないという意味ではなく（というのも形態は持っているのだから．それ故，懲罰に対する共感は備えている），むしろ救われる霊的な物体との比較において，非物体的な影と呼ばれるのである．2）天使たちもまた物体である．彼らはその姿が目に見られる．だがそればかりでなく，霊魂もまた物体である．実に，使徒がこう述べている．＜魂的な身体が蒔かれ，霊的な身体が蘇る＞（1ｺﾘﾝﾄ15,44）．3）ではいったい，懲罰を受ける諸霊魂は，物体ではないにも関わらず，どのようにして共感を得るのであろうか．実に，使徒はこう述べている．＜あなた方は，死後も力を持ち，霊魂をも身体をもゲヘンナに投げ込むことのできる方を恐れよ＞（ﾏﾀｲ10,28）．4）というのも目に映るものは火によって浄められることがなく，土に解体するからである．まさしくラザロと金持ちのたとえ話から，霊魂が，物体的な四肢を備えた身体であるということが示されている（ﾙｶ16,24）．

15.1）＜われわれは，土質的な人の似像を担ったのと同じように，天上的な方の似像をも担おうではないか＞（1ｺﾘﾝﾄ15,49）．ここで「天上的な」というのは「霊的な」というのと同義であり，われわれは，進捗によって完成されるのである．さらに言えば「似像」と使徒が言っているのは，「霊的身体」という意味である．2）使徒はまた，こうも述べている．＜われわれは，今は鏡に映ったものをおぼろげながら見ている．だがその時には，顔と顔とを合わせて見ることになる＞（1ｺﾘﾝﾄ13,12）．こうしてその時にこそ，われわれは直ちに認識し始めるのである．（欠落あり）．その方の顔ばかりでなく，姿もかたちも身体も目にすることになる．すなわち，かたちはかたちを通して，顔は顔によって観想され，特徴は，形と実体を通じて認識されるのである．

16）そして鳩は，実体としてその姿が見られた．この鳩について，ある人々は聖霊だと言い，バシレイデス派の人々は助祭だと言い，ウァレンティノス派の人々は父の意欲（enthymēsis）の霊だと言う．彼らによれば，この霊は御言葉の肉に向けて降下を為したのだという．

17.1）イエスと教会と智慧とは，ウァレンティノス派の人々によれば，全物

体にわたって力を持つ混合体である．2）実に，二つの種子が混じり合う婚姻に伴う人間的な混淆によって，一人の子の誕生が完遂され，身体は大地へと解体されて大地と混合し，水はぶどう酒と混合する．その一方で，より力を有しより卓越した諸物体は，より容易に混淆を遂げる．実に，霊は霊と混じり合うのである．3）しかるにわたくしに思われることには，これは併置によって生じるのであって，混淆によって生じるのではない．実に，神的な力が霊魂に及び，完全な過程を経ることで霊魂を聖化するのではないだろうか．というのも＜神は霊であり，望むままに吹く＞（ﾖﾊﾈ4,24；3,8）からである．4）なぜなら可能態は実体として力を持つのではなく，むしろ可能態と力の故に力を持つのであり，霊が霊魂に併置されるように，霊は霊に併置されるのであるから．

18.1）救い主は，降下して来るのが天使たちに見られた．それゆえに天使たちは救い主を祝した．だがそればかりでなく，アブラハムや，休らいのうちに，主の右側にいたその他の義人たちにも見られた．というのも使徒が＜アブラハムはわたしの日を見て喜んだ＞（ﾖﾊﾈ8,56）と言っているからであり，この「わたしの日」というのは，肉における顕現を意味している．2）そこから主は復活し，休らいのうちにある義人たちに福音を伝え，彼らを立たせて移し替えた（ｺﾛｻｲ1,13）．こうしてすべての人々は＜主の影のうちに生きるであろう＞（哀歌4,20）．というのもここで「影」というのは，父の許での救い主の栄光の，この世における顕現のことである．光の影は闇ではなく，輝きなのであるから．

19.1）＜そして御言葉は肉となった＞（ﾖﾊﾈ1,14）．これは単に顕現によって主が人間となったということのみならず，原初において同一性のうちにある御言葉が，その実体においてではなく，外貌において御子となった，という意味である．2）そして主は肉となったが，その肉とは，預言者たちを通してその活力を得る者である．一方救い主は，同一性のうちにある御言葉の子であると語られる．それ故＜初めに御言葉があった．御言葉は神であった．この御言葉は神とともにあった．この御言葉のうちに成ったもの，それが生命である＞(ﾖﾊﾈ1,1；1,3以下)．しかるに生命とは主である．3）またパウロは＜神にならって創造された新しい人を身にまとうがよい＞（ｴﾌｪｿ4,24）と述べる．言わばこれは，神によって＜神にならって＞創造された方，その人を信じよ，という意味である．この方は神のうちにある御言葉である．しかるに人間は，進捗の目的が，先んじてそこに向かっている＜神にならって創造された方＞を，＜そこ

に向かってあなたが創造された目的＞を受け入れよ，という句と同義として告げ知らせることができる．4）そしてパウロは，一層明瞭にまた明確に他の言葉を用いてこう述べている．＜この方は目に見えない神の似像である＞（ｺﾛｻｲ1,15）．さらに彼はこう付け加える．＜この方はあらゆる被造物の初穂である＞．というのも＜目に見えない神の像＞というのは，御子のことを述べており，彼が同一性のうちにある御言葉の子であるということを指す．一方＜あらゆる被造物の初穂＞とは，彼が情動を伴うことなく生まれ，あらゆる被造物また実体の創造者にして誕生の創始者であることを指す．というのもこの方のうちに父は万物を創造したからである．5）ここから彼は＜しもべの姿を取った＞とも述べられる．これは顕現の際の肉のことを指しているだけでなく，その基体の実体をも指すものである．その実体とはしもべの如きものであり，あたかも情動を被り，活動性に満ちた支配的な原因の基にあるかの如くだからである．

20）というのも＜曙に先立ってわたしはあなたを産んだ＞（詩編109,3）という句について，われわれはこれが最初の被造物たる神の御言葉を指すものであり，＜太陽よりも前に＞，月よりも，あらゆる被造物よりも前に＜あなたの名はある＞（詩編71,17）という意味だと聞き及んでいるのである．

21.1）＜神は，神の像として人間を創り，彼らを男と女に創った＞（創世1,27）という句によって，ウァレンティノス派の人々は，智慧の最良の産出が語られていると述べる．この産出のうち，男性的なるものとは選びであり，女性的なるものとは呼び名であって，彼らは男性的なるもののことを「天使的」とも呼ぶ一方，女性的なるものとは自分たち自身のことであると解し，相互に異なった種子であると解している．2）同様にアダムに関しても，男性的なるものが彼のうちに留まる一方，女性的なる種子がすべてアダムから取り去られてエヴァとなった．アダムから男性が生じたのと同様に，このエヴァから女性たちが生じたとする．3）というわけで，男性的なるものは御言葉とともに遣わされたが，女性的なるものは男性化されて天使たちと一体化し，充溢へと進みゆく．それ故女性は男性へと変容すると述べられ，この世の教会は天使たちとなる，と彼らは解する．

22.1）そして使徒が＜死者たちのために洗礼を受ける人々は，何のためにそうしようとするのだろうか＞（1ｺﾘﾝﾄ15,29）と言うとき，使徒は，天使たちがわれわれのために洗礼を受けたと言っているのであるが，われわれは天使たち

の一部なのである．2）しかるにわれわれは，この状況にあって死したる者となっていて死者なのであるが，この状況から変転せざる男性たちは生ける者だ，という意味である．3）＜もし死者たちが蘇るのでなければ，われわれは何のために洗礼を受けるのだろうか＞（1ｺﾘﾝﾄ15,29）．つまり，われわれが蘇るとき，それは男性となり天使に等しきものへと，一性に向けて原初的に還帰されるのであるが，その際四肢に関しても男性の体躯となる．4）しかるに彼らは，＜われわれ死者たちのために洗礼を受けた者たち＞とは，われわれのために洗礼を受けた天使たちのことであり，それはわれわれもまた，その名を有し，「定義」と「十字架」に沿って，充溢の域にまで至ることを妨げられて達成しえないことのないようにするためだと言う．5）それ故，按手の際，その最後に「天使的な贖いのため」と言うが，これはすなわちこの贖いとは天使たちも有しているものであって，その目的とは，洗礼を授かった者たちが，天使もその人に先駆けて受洗した，それと同一の名において贖いを携えるようにするためである．6）しかるに，原初にあって天使たちは，イエスの上に鳩の形で降り（ﾏﾙｺ1,10），彼を贖った名の贖いのうちに洗礼を受けたのである．7）だがイエス自身にも贖いは必須であって，それはテオドトスが言うには，智慧を通して先に到来していた者が，必要に迫られてそこに置かれていた「想念」に妨げられることのないようにするためだ，というのである．

23.1）ウァレンティノス派の人々は，イエスのことを「慰め主」と言っているが，それは彼が諸々の世に満ちて到来したからであり，ちょうど万物に先駆けて到来したのと同様だとする．2）というのもキリストは，彼を生み出した智慧を後にして充溢のうちに入り，外界に放置された智慧によって援助を要請され，諸々の世の善意からイエスとして生まれた．過ぎ去った世に対する慰め主としてである．しかるに，慰め主の姿をとって，パウロが復活の使徒となった．3）主の受難の後直ちに，このパウロが福音の宣教のために遣わされた．それ故パウロは各々の土地で，この救い主が，最善なる人々にとっての真正なる受難者であると宣べ伝えた．すなわち，この方を認識することができるのは，この場所において，聖霊と処女から霊的なるものに従い，この方を恐れる者たちである．それは右側に坐す天使たちが認識することができるようになるためである．4）というのも各々の者が個々の仕方で主を認識し，万人が同じように＜小さき者たちの天使たちが，父の御顔を仰ぎ見ている＞（ﾏﾀｲ18,10）ようではないのである．この小さき者たちとは選ばれた者たちであり，同じ嗣業と完全性のうちに与かるであろう者たちである．5）おそらくはこの御顔と

いうのは御子であり，また父の把握しうる部分に応じて子を通じて彼らは教えられ，観照するのである．しかるに，父のそれ以外の部分は知られざる部分である．

24.1）ウァレンティノス派の人々は，預言者たちの一人ひとりが持っている，奉仕のための卓越した霊が，教会の構成員すべてに注がれたと述べる．それゆえ，霊のしるし，癒し，預言は，教会を通じて全うされるのである．2）しかしながら彼らは，現在止むことなく教会のうちに働いている慰め主（Paraklētos）が，いにしえの律法に基づいて休むことなく働いている方と同じ本質と力に属している，ということを知らない．

25.1）ウァレンティノス派の人々は，天使のことを「存在者を記述する言葉」と定義づけている．また彼らは「世」（aiōn）のことを，ロゴスと同義語であるとして「言葉」であると言う．2）彼が言うには，使徒たちはこれを黄道十二宮に移し替えた．というのも，これらの宮によって誕生が司られるからである．それと同じように，再生は彼ら使徒たちによって監督される，という．

26.1）イエスの目に見える部分とは「智慧」であり，様々に異なった種子よりなる「教会」であって，この教会を，イエスは肉的なものをもって飾った．これはテオドトスの述べていることである．一方目に見えない部分とは「名」であり，それは「独り子なる御子」（ﾖﾊﾈ1,14）というものである．2）それ故，イエスが＜わたしは門である＞（ﾖﾊﾈ10,7）と言うとき，「わたしがそれであるところの域にまで，様々な種子から成るあなた方は来たるであろう」ということを述べているのである．3）しかるにイエス自身が到来するとき，種子もまた，この門を通って集められ導き入れられて，イエスとともに充溢のうちへと入るのである．

27.1）祭司は第二の垂れ幕の内側に入り（ﾍﾌﾞﾗｲ9,7；ﾚﾋﾞ16,3），献香のための祭壇の傍らにある板を取り外し，自らは沈黙のうちに，心の中に刻み込まれた名を持って内側に入る．そして罪の浄めによって浄らかかつ空虚となり，いわば黄金の板を取り除くさまを示す．それは言わば霊魂から身体を取り除くような行為である．その身体には，敬神の念の喜悦が刻み込まれていて，それを通じて諸権限や諸権能の傍らに位置してその名を知るのである．2）しかるにこの身体を取り除くや，その板は重さを失い，第二の垂れ幕の内側に入ることが叶う．それは思惟界の内側であり，万物を表す第二の完全な垂れ幕であって，献香のための祭壇の傍らにあり，捧げられるべき祈りに奉仕する天使たち

に向けられる．3）しかるに霊魂は，知悉者の力の内にあっては裸形となり，言わば力の身体の如くになって，霊的なものへと変転し，真に理性的そして大祭司的となる．それは言わば，あたかも御言葉によって，何かすでに止むことなく魂化された状態となって，言わば天使たちの中の大祭司的な大天使となり，さらには彼らの中ので最初に生まれた者たちとなるのである．4）この霊魂が浄らかな者となった際，さらに書物と学びの正しさがどこで成立するのだろうか．その場所とは＜顔と顔を合わせて＞（1ｺﾘﾝﾄ13,12）神を見るに適う者とされる場所なのであるが．5）この霊魂は実に，天使的な教えや書物の形で教えられた名を超越し，諸事物の覚知と把捉の域に達していて，もはや花嫁ではなく，むしろすでに御言葉となり，花婿の傍らで，最初に招かれた者たちや最初に創造された者たちとともに座を占める．友人たちとは愛を通じて，御子たちとは教えと聴従を通じて，また兄弟たちとは生まれの共通性を通じてである．6）かくして，ある事柄は経綸に属するものであり，それは板を携え覚知に向けて学ぶことであるが，またある事柄は力に属するものであって，それは主によって止むことなく力動性を得て，言わば主の身体と化し，神を担う人間となることである．

28）＜神は，不信なる者どもに対し，その罪を三代，四代までも問う＞（申命5,9）ということを，バシレイデス派の人々は肉体化（ensōmatōsis）に関して語られたものだと言う．しかるにウァレンティノス派の人々は，「三」というのは左側の場所が明らかにされたものであるが，「第四」とは世代のことで彼らの末裔を意味し，＜幾千代にもわたって憐れみをかける＞（申命5,10）というのは右側の人々について語られたものだとする．

第２部　抜粋29－42

あ．深淵と沈黙：智慧と時代（ｱｲｵｰﾝ）の「受難」

29）彼らは言う．「沈黙とは深みによって設定されたすべての事物の母であり，この深みとは語り得ないものであるがゆえに，彼は＜語られ得ないもの＞については沈黙を守り，把握した限りのことどもについては，これを＜把握しえないもの＞と述べたのである」と．

30.1）その後彼らは神の栄光を失念し，不敬にも，主は苦難を被ったと言っている．というのもテオドトスは，父がともに苦難を被った事柄に関して，本

性上不動にして不屈の主は，自らを従順なる者として奉献したとする．それは，沈黙がこれを受容せんがためであった．これが受難である．2）というのも共苦とは，誰か他者の苦難を通じての，ある人の苦難ということだからである．実に，受難が生じたとき，全体が苦難を被り，受難者を支えるために自らをも提供したのである．

31.1）だがそればかりでなく，もし降下して来たる者が，万物のエウドキア（善意）であるとすれば（というのも＜彼のうちにすべての充溢が実体となっている＞【ｺﾛｻｲ2,9】からである），この彼もまた苦難を被るはずである．したがって，彼のうちにある諸種子もまた共に苦難を被り，その諸種子を通じて万物そして全体が苦難を被るのが認められるはずであることは明らかである．2）さらにそればかりでなく，彼らが言うには，12個の「世」（aiōn）の苦難（peisis）を通じて万物が教育され，共に苦難を被るのである．3）というのもこのとき，それらは，自らが何者であるかを知り，自らが父の恩寵によって存在するのだということを認識するからである．それは名づけられ難い名であり，形状であり覚知なのである．一方，覚知を超えるものを獲得することを欲する「世」が，無知と無形のうちに成っていた．4）そこから覚知の空虚が作り出されたが，これこそ名の影である．またこれは御子であり，諸々の「世」の形状である．こうして，諸々の「世」の各部分における名は，名の喪失なのである．

い．対立する二つの像：智慧から発したものとしてのキリストとアルコン

32.1）かくして一性が成立するや，その充溢のうちに諸世の各々が，固有の充溢，連帯（plērōma）を有する．こうして，彼らが言うには，その連帯から出で来たるものはすべて充溢であり，その一性から出で来たるものは，その像である．2）その故にテオドトスは，智慧の思惟から進み出るキリストを，充溢の像と呼んだ．3）このキリストは母を後にし，充溢の座にまで昇り，いわば万物と，すなわち慰め主とも混淆する．33.1）実にキリストは，子としての立場に置かれたものとなった．それはちょうど，充溢に照らして卓越した者となり，この地上での事物のうち＜初穂＞（ｺﾛｻｲ1,15）となったというのと同様である．

2）かくしてこの御言葉は，救い主のことを，基体の上で＜初穂＞と呼ぶようなわれわれの論理には従わないものである．しかも彼は，言わばわれわれの

根であり頭である一方，教会とはこの彼の実りなのである．

3）彼らが言うには，キリストが，非本来的なものを遠ざけ，かつ母の想いから充溢のうちへと送り込まれることによって，母は再度，この主，すなわちより力ある者を切望することによって彼女を遠ざける者の場所へと，経綸の支配者を導いた．より力ある者とは，万物の父の予型である．4）それ故彼は，言わば欲望の情動から成立した者であるかの如くに，より力を失った者となる．もっとも彼らによれば，この母は彼の頑強さを目にして嫌悪したという．

34.1）だがそればかりではなく，左側に置かれた諸力は，この母によって右側の諸力よりももたらされていたものの，光の顕現のために形状化されることなく，「場所」によって形状化されるのを待つべく，左側に置かれたまま留まることになった．2）こうして母が，子および諸々の種子とともに充溢のうちに入ると，そのときこの「場所」は，母がいま手にしている権限と地位とを奪うことであろう．

う．根源的統一：イエスと天使，天使とわれわれ

35.1）イエスは，使徒が言うように（ﾖﾊﾈ8,12），われわれの光であり，自らを「虚しくし」（ﾌｨﾘﾋﾟ2,7），すなわちテオドトスによれば「定義」から外に出る．それは彼が充溢の使者だからである．そして異なる種子の使いの者たちを，自らと集わせる．2）自らは，充溢から進み出た者として贖いを有し，使いの者たちを，種子の樹立へと導く．3）というのも，この使いの者たちはいわば，一部分のために懇願し，招き，われわれのために維持され，内側に入らんと努め，われわれのために赦しを求めているのであるが，それはわれわれが彼らとともに入るためである．4）なぜなら彼らとて，われわれを必要としているのであるが，それは彼らが入るためなのである．というのもわれわれなくして，彼らには許しが与えられないからである（それゆえ彼らが言うには，われわれなくしては母もともに入ることがない）．まさしく彼らは，しかるべくしてわれわれのために懇願しているのである．

36.1）彼らが言うには，実に，われわれの天使たちは一性のうちに置かれている．天使たちは言わば，一者から発出したかの如くに，一なるものなのである．2）それに対し，われわれは分かたれたものである．それ故，イエスは洗礼を受けた．イエスがわれわれを，彼らと充溢のうちに一なるものとするまでは，分かたれざるものが分かたれている，と彼らは言う．これはわれわれが，

多数であるにもかかわらず一なるものとなり，われわれがすべて，われわれのために分かたれている一者へと混淆されんがためである．

え．（魂的）「場所」：種子の通行

37）アダムから出で来たる者たちの中で，義人たちは，被造物を通って道を進み，かの「場所」に留められる．一方それ以外の者たちは，闇の中で創られた事物のうちにあり，左側に置かれて炎を自覚する．これはウァレンティノス派の見解である．

38.1）さて，火の川が「場所」の座の下部から流れ出し，被造物の空虚の中へと流れ込んでいる．この空虚こそゲヘンナであり，流れ続ける火の被造物によって満たされることはない．そしてこの「場所」そのものも火に燃え盛っている．2)それ故，彼が言うには，この「場所」は垂れ幕を持っていて，それは，諸霊がその姿を見られることで消尽してしまわないようにするためである．この「場所」にはただ，大天使だけが歩み入ることができ，その像としての大祭司が，一年に一度だけ，至聖所のうちに入ることができる（ﾍﾌﾞﾗｲ9,7）．3）イエスもまた，ここから招かれてこの「場所」にその座を占めるが，これは，諸霊が留まり，イエスよりも先に復活することのないようにするためである．また，イエスがこの「場所」を制し，種子に対して充溢への道を提供するためである．

お．霊的種子の出産，浄化と「形状化」

39）母はキリストをまったき嗣業者として生み，彼が自らを後にしたのちには，それ以降もはやまったく嗣業者を生むことはなかった．むしろ可能性を自らの許に保持した．こうして自らは，「場所」と「招かれた者たち」を伝えるものを生み，自らの許に保持している．天使たちのうち選ばれた者たちは，すでに以前から，男性によって生み出されているからである．

40）というのもその右の手は，光が要請される以前に母によって差し出されていたが，教会の種子は，光の要請の後，男性によって天使的な種子がもたらされたときに提供された．

41.1）彼が言うには，様々な種子は，情動が解消されたからそれとともに種子も解体する，といった情動のようなものではない．また被造物に先行するよ

うなものでもない．むしろ，子供たちのようなものである．2）というのも，被造物が準備され終わると，それとともに種子も備えられるというものだからである．それ故に種子は，光に対する親近性を有しており，その光とは彼が最初に導入したものであって，それはすなわちイエスである．このイエスとは，諸々の世を求めたキリストであり，彼のうちにおいて，諸々の種子はその可能態に関して洗練を施され，キリストと道を同じくした種子は，充溢へと導かれる．こうして，世の創造以前に教会が選び抜かれた．というのも，相応しい言い方なのである．かくして彼らが言うには，原初においてわれわれはロゴスを与えられ，光を帯びた者とされた．3）それ故に救い主は＜あなた方の光を輝かせよ＞（ﾏﾀｲ5,16）と述べる．これは，光を発し形成を行う光に関して告げるものである．これについて使徒はこう述べる．＜すべての人を照らす光が世界に到来した＞（ﾖﾊﾈ1,9）．この「世界」とは，異なった種子の世界のことである．4）というのも人が照らされたとき，そのときにこの光は到来したのであり，すなわち彼が自らを飾ったのであって，自らから，影を落とし自らに混ざった情念を分離させたわけだからである．そして創造者はアダムを想念（Ennoia）のうちに置き，創造行為の最後に至って彼を登場させたのである．

か．十字架，イエスと種子の象徴

42.1）十字架とは，充溢における「定義」の徴（sēmeion）である．なぜなら十字架は，不信なる者どもを信篤き者たちから分かつからである．そのあり方はちょうど，救い主が世を充溢から分かつのと同様である．2）かくしてイエスは，諸々の種子を，この徴によってその両肩に担い，充溢へと導き入れる．なぜならイエスは，種子の肩と呼ばれているためであり，キリストとは頭である．3）ここからこう述べられる．＜自らの十字架を負ってわたしに随って来ない者は，わたしの兄弟ではない＞（ﾙｶ14,27）．こうして彼はイエスの体を担った．この体は，教会と同一本質なるものである．

第３部　抜粋43－65

あ．救い主の派遣と智慧の「形状化」

43.1）かくして彼らが言うには，イエスの右の手は，その到来以前からキリストの名をも知っていたが，徴の力を知ってはいなかった．2）そこであらゆ

る権能を父が与え，充溢も教示を加えたので，「意向の天使」（ｲｻﾞﾔ9,6）が遣わされた．3）こうして彼は，父に次いで万物の頭となった．なぜなら「すべての事物，見えるもの見えざるもの，玉座，主権，王国，神性，礼拝は，彼のうちに創造された」からである（ｺﾛｻｲ1,16）．4）それゆえ「神は彼を高く挙げ，彼に，すべての名に勝る名を与えた．それはすべての膝がおのれをかがめ，すべての舌が＜救い主であるイエス・キリストは栄光の主である＞と告白するためである」（ﾌｨﾘﾋﾟ2,9－11）．「彼は昇り，そして降った．＜昇った＞というのはどういう意味だろうか．＜降った＞ということでもあるのに違いないのではなかろうか．彼は，地の最も深いところにまで降り，天のさらに高いところにまで昇ったのである」（ｴﾌｪｿ4,9以下）．

44.1）さて「智慧」は彼を見て，その様が，自らを棄てていった光に似ているのを知り，駆け付けて讃美し，ひざまずいた．また，彼とともに遣わされた天使たちが男性であるのを目にし，恥じらいを覚えて覆いをまとった．2）この神秘のゆえに，パウロは婦人たちに対し，「天使たちを通じて権能を頭に被る」ことを命じるのである（1ｺﾘﾝﾄ11,10）．

い．創世論

45.1）そこで救い主は彼女に対し，直ちに，覚知，および情動の癒しによる形状化を付与した．その際，生まれざる父に遡って，充溢のうちにあるもの，そして形状化にいたるまでの事柄を示した．2）主は，苦難に陥った彼女から情動を取り去り，彼女を無情動の状態に整え，情動についてはこれを峻別して彼女を保護し，内にあるものをあたかも散らすようなやり方ではなく，むしろ内にあるものと，第二の状態にあるものとを，実体へと導いたのである．3）かくして救い主の顕現を通して智慧は無情動なるものとなり，外側にあるものが作られたのである．＜すべてはこの方によって成り，この方なくして成ったものは一つもなかった＞（ﾖﾊﾈ1,3）からである．

46.1）そこで，それら諸情動は，最初に非実体的で付随的な情動から，さらに非実体的なものへ，しかる後，混合体（synkrima）そして実体へと質料を移し替え，変転させた．情動が直ちに実体を構成することは不可能だったからである．そこで智慧は，諸物体に対し，本性に適った固有の能力を備えたのである．

47.1）そこでまず創造者は，普遍的な救い主となった．一方＜智慧＞が第二

のものとして，＜自らのために家を建て，七本の柱でその家を支えた＞（箴言9,1）．2）そして万物のうちで最初に，父の像としての神を生み出した．父はこの方を通じて天と地を創造した．これがすなわち＜天にあるものと地にあるもの＞（ﾌｨﾘﾋﾟ2,10），すなわち右にあるものと左にあるものである．3）この方が父の像として父となり，まずは御子の似像として魂的なキリストを生み出し，しかる後，諸々の世の像として大天使たちを生み出したのである．そしてさらに，魂的で光り輝く実体から，大天使たちの天使たちを生み出した．この実体のことを，預言者の言葉は＜神の霊が水の上を漂っていた＞（創世1,2）と述べている．これは，同時に創造された二つの実体の混淆に関して，純粋な物質が＜漂っていた＞と述べる一方，重たく質料的な部分は下方に沈んだと語っているのである．それらは泥のようで容積を占めるものである．4）しかるにこの実体もまた，原初にあって非物体的であるということが，＜目に見えない＞という表現で仄めかされている．というのもそれは，未だかつて存在していない人間にも，また神にも不可視だからである．このとき神は，創造行為の途上にあった．だがこの実体の無形性，不可視性，そして無形態性を，聖書記者はここでこのように表明しているのである．

48.1）さて創造者は，浄らかな部分を重量のある部分から分かつ．それはあたかも，各々の本性を見抜いていたかのようである．こうして創造者は光を創造する．すなわち輝きを出ださせ，光とイデアへと導き出す．というのも太陽と天上の光が形成されるのはずっと後になってからのことだからである．2）こうして創造者は，質料的なものから，まず苦悩の起源となるものを作り出す．つまり＜悪に属す霊的なもの，われわれが闘いがそれと対峙するもの＞（ｴﾌｪｿ6,12）を実体として創造するのである．それ故使徒もこう述べている．＜神の聖なる霊を悲しませてはならない．あなた方はその霊のうちに封印されたのだから＞（ｴﾌｪｿ4,30）．3）その一方で，恐怖の起源となるもの，すなわち野獣類を，また驚愕と困惑の起源となるもの，すなわち世界の要素を作り出す．4)さて三つの要素のうち，火は漂い，蒔かれ，潜み，それらの要素によって支えられ，それらによって死滅する．これは，それ以外の要素，それらによって混淆物が形成されるものと同じようには，火が自らのために定められた場所を有することがないからである．

49.1）だが創造者は，自らによって働く彼女のことを認識しておらず，自らが本性的に業を好むがゆえに，固有の力によって創造しているのだと思い込んだ．それ故に使徒はこう述べている．＜被造物は，世界の虚しさに服している．

これは自らの意志によるものではなく，むしろその虚しさに服させた方の故である．だがそこには希望があり，それは，被造物もまた自由なかたちに解放されるであろうというものである＞（ﾛｰﾏ8,20）．すなわちこれは，神の諸々の種子が集められるときである．2）とりわけ，これが自らの意志によるものではないということの証拠は，安息日を祝すことと，労苦からの休息を大いに好むことである．

う．人間論

50.1）＜主は大地から一握りの土を取った＞（創世2,7）．この「大地」とは乾いた部分ではなく，多くの部分より成る多様な質料の一部である．こうして主は，土質的で質料的かつ非理性的，そして獣性と同質の霊魂を形作った．これこそ＜像＞（創世1,26）としての人間である．2）一方，創造者自身の＜似姿＞としての人間とは，そのうちに創造者が＜息を吹き込み＞，そのうちに種子を蒔いたものであり，これは，天使たちを通じ，自らと同質なるものをそのうちに入れたものである．3）創造者が目に見えず非物体的であるのと同じように，その実体は＜生命の息吹き＞（創世2,7）であると語られている．これは形を与えられることで＜生ける霊魂＞となった．これが「存在」であることは，主自らが預言の諸書において同意していることである．

51.1）こうして人間のうちに人間があり，大地よりできたもののうちに魂的なものがある．だが部分的なもののうちに部分的なものがあるのではなく，むしろ全体が全体とともに共在する．これは神の語られ得ない力によることである．それ故人間は，楽園に，第四天に創造されたのである．2）というのもそこには，土でできた肉が昇り行けるはずはなく，むしろ質料的なものが，いわば肉の如くに神的な霊魂のうちにあるのである．このことこそ＜今や，これこそわたしの骨のうちの骨＞（創世2,23）という一節の意味であり，神的な霊魂が肉のうちに隠され，それは堅固で情動を被ることなく，情動に優る力を持ったものであることを仄めかしているのである．また＜これこそわたしの肉のうちの肉＞（創世2,23）という一節は，質料的な霊魂が，神的な霊魂の本体であるということを述べたものである．3）これら二つのものに関しては，救い主が＜この霊魂，およびこの身体を＞すなわち魂的部分を，ゲヘンナにおいて＜滅ぼすことのできる方を恐れねばならない＞（ﾏﾀｲ10,28）と述べている．

52.1）このような肉的なもののことを，主は＜あなたを訴える者＞（ﾏﾀｲ5,25）

と言い，パウロは＜わたしの心の掟と対立している掟＞（ﾛｰﾏ7,23）と述べている．それを主は＜縛り上げよ＞（ﾏﾀｲ12,29）と勧め，それから＜力ある者の家財道具を略奪せよ＞と教えるのである．この「力ある者」とは，天上的な霊魂に抗して戦いを挑んでいる力のことである．そして救い主は，この力から＜解放されよ＞，＜われわれが看守の手に落ち，懲罰に定められないように，道の途中で早く＞と勧告するのである．2）同様に主は，この力と＜和解せよ＞と勧告する．つまり，罪の権力に育まれ力づけられることのないように，むしろこの世にあってすでに，悪の根絶の故に死者と化し力を失ったかのごとき様を見せるようにせよと勧める．これは，このような肉的なものが解体することによって，人知れず雲散霧消し，それ自体として何らかの基盤を得て，火による推移のうちに確固たる力を得たりすることのないようにさせるためである．

53.1）これは，霊魂に元来備わっているものであり＜毒麦＞（ﾏﾀｲ13,25）と名づけられている．霊魂は「よい種子」に当たるが，毒麦とは悪魔の種子でもあって，悪魔と本質を同じくし，ヘビ，引き抜き屋，王の頭上に冠せられた盗賊である．2)しかしながらアダムは，不明瞭な形ではあるが，自らのうちに，智慧によって霊魂に蒔かれた霊的な種子を有していた．使徒は言っている．＜これは天使たちを通じて，仲介者の手に委ねられたものである．だが仲介者は一人で事を行う際には不必要である．けれども神は唯一である＞(ｶﾞﾗﾃﾔ3,19以下)．3）こうして男性の天使たちによって，創世の際，智慧によって生み出された諸々の種子が，生成するに適う限りにおいて用いられた．4）というのも創造者は，明確な形ではないにせよ智慧によって動かされたが，自ら動くものだと自認していた．それは人間たちに関しても同様である．5）かくしてまずは最初の霊的な種子となったのは，智慧がアダムのうちに蒔いたものである．それはこの種子が骨となり，理性的にして天上的な霊魂となって，霊的な髄液を享受するようにするためである．

54.1）アダムからは三つの本性が生まれた．最初の本性は非理性的なものであり，カインはこれに属す．二番目は理性的にして正しきものであり，アベルはこれに属す．そして三番目は霊的なものであり，セトはこれに属す．2）そして土より成る部分は＜像として＞できたものであり，魂的な部分は＜神の似姿として＞できた部分である．しかるに霊的な部分は「個々に」できた部分である．これら三つの部分については，アダムの他の子供たちを通さずに語られている．＜これこそ人間の誕生の書である＞（創世5,1)．3）セトは霊的なものであるから，彼は牧畜も農耕もせず，ただ子を，いわば霊的なものを儲け

るように，儲けるのみである．そして＜主の名が呼び求められることを希望した＞この彼は，天上界に眼差しを注いでいて，彼の＜住まいは天上にある＞(ﾌｨﾘﾋﾟ 3,20)．すなわち彼を世は受け入れることができないのである．

55.1）これら非物体的な三つの本性に加え，アダムに関しては，土からできたものがさらに四番目に＜皮でできた衣＞(創世3,21)をまとった．2)したがってアダムが種を蒔いたのは，霊からでも，したがって息吹きからでもない．なぜならそれらは両者とも神的なものであり，神を通じてではなく，神によってこの両者は生み出されたからである．3）むしろ彼の質料的な部分が種子そして誕生のために働きをなした．その次第はあたかも，その質料的なものが種子に混ざり，生命のうちなる調和から離れることができないという様であった．この意味でアダムはわれわれの父なのである．56.1）それ故，われわれの父祖であるアダム，すなわち＜最初の人間は，土からできたものであった＞（1ｺﾘﾝﾄ15,47)．2）だが彼がもし，魂的なものおよび霊的なものから，あたかも質料的なものからでもあるかのように蒔いたとすれば，すべての人々が等しく義なる者たちとなり，すべての人々のうちに教えが授けられたことであろう．それゆえ多くの人々は質料的であり，魂的な人々は多くないのである．だが霊的な人々はごくわずかである．3）というわけで，霊的なものとは本性的に救われたものである一方，魂的なものは，自由意志を付与されたものであり，信仰と不腐敗性に対して，および不信仰と腐敗性に対して，自ずからなる選択による適性を持っているのである．これに対して質料的なものは，本性的に破滅している．4）したがって，魂的なものが＜野生のオリーブに接ぎ木され＞(ﾛｰﾏ11,24)，信仰と不腐敗性へと向かうならば，＜オリーブの敬虔さ＞（ﾛｰﾏ11,47）に与かることになる．そしてもし＜異邦人のなかに入る＞（ﾛｰﾏ11,25）なら，そのときには＜すべてのイスラエルは救われる＞．5）ここで「イスラエル」という語彙で仄めかされているのは，霊的な人間で，神を見るであろう人のことである．それは信篤きアブラハムの子で，＜自由から生まれた＞（ｶﾞﾗﾃﾔ4,23）真正な子であって，＜肉の子＞すなわち僕の女であるエジプトから生まれた子ではない．

57）かくして三つの類からは，ある場合には霊的なものの形成が，ある場合には魂的なものの隷属から自由に向けての変化が生じる．

え．キリスト論

58.1）さて，死の支配の後，大いなるものにして見目麗しき告知が行われた．これは死に劣ることのない奉仕となり，そのためあらゆる権力と神性が消え失せた．偉大なる闘士イエスは自らのうちに力をもって教会を取り込んだ．それは選り抜きの招かれたものであり，母から受け継いだある部分は霊的なもの，経綸から受け継いだある部分は魂的なものである．イエスはこうして，取り込んだものを救い取り止揚させて，これらを通じてさらにこれらに類似した部分をも取り込んだ．2）なぜなら＜初穂が聖なるものであれば，練り粉もそうであり，根が聖なるものであれば，枝もそうである＞（ﾛｰﾏ11,16）からである．

59.1）かくして彼はまず，生みの母より種子をまとう．彼はここに容れられたのではなく，力によってこれを容れたのである．この種子は，微細な部分にいたるまで覚知によって形成されたものである．2)「場所」に従って彼はイエスとなり，前もって告げ知らされていたキリストをまとうことを見出す．このキリストとは預言者たちと律法とが告げ知らせていたもので，救い主の像である．3）そればかりでなく，これは魂的なキリストでもあり，これこそ彼がまとったものである．それは目に見ることができないが，世に来ることが不可欠な存在であった．目に見えるものとなるために，治められるものとなり，生活をし，感覚的な肉体をまとうことが不可欠であった．4)したがって彼がまとった肉体は，目に見ることのできない魂的な実体よりなるものであったが，彼は神的な構成の力によって，感覚的世界に到来したのである．

60）したがって，＜聖霊が到来してあなたの上に臨む＞（ﾙｶ1,35）というのは，主の肉体の誕生を述べたものであり，＜いと高き方の力があなたを覆う＞とは，神の形状化のことを語ったものである．彼はその形状化を，処女のなかで，体として形作ったのである．

61.1）彼が，彼の受け取ったものとは別の者であるということに関しては，彼が認めている事柄から明らかである．＜わたしは生命であり，わたしは真理であり，わたしと父とは一である＞（ﾖﾊﾈ14,6；10,30）．しかるに彼が受け取った霊的なもの，および魂的なものに関して，彼は次のように表明している．＜子は成長し，智慧のうちに進捗を遂げた＞（ﾙｶ2,40；2,52）．というのも霊的なものは智慧を必要とする一方，魂的なものは大きさを必要とする．3）しかるに（主の）わき腹より流れ出したものを通じ，情動を被るものどもからの

情動の流出によって，実体が非情動的なものとなり，救われたのだと言うことを明らかにしている．4）そして＜人の子は，審議にかけられ，侮辱され，十字架につけられねばならない＞（ﾙｶ9,22；18,32；24,7；ﾏﾙｺ8,31）と主が言うときには，他の人物，すなわち情動のうちにある人間について言及しているように思われる．5）さらに＜わたしは三日目に，あなた方に先んじてガリラヤに行く＞（ﾏﾀｲ26,32）と主は述べる．なぜなら主は，自らすべてに先んじて行うからである．そしてこれは，主が目に見えない仕方で救われる霊魂を，復活させるであろうこと，そして現在は主が先んじているものを還帰させるであろうことを仄めかしたものである．6）しかるにヨルダン川で，彼の上に降った霊が離れ去った際に，彼は死去した．だがこの霊は，自らそう成ったものではなく，遣わされたものであり，それは死が効力を持つようにするためであった．なぜなら彼のうちに生命が現存しているのに，どうして身体が死ぬことがあり得ようか．従って，このようにして，この救い主をも死が支配したことであろうが，それは当てはまらない．しかるに死は，欺きを以て制圧されたのである．7）というのも身体が死し，身体を死が支配した後，救い主は到来した力の矢を滅ぼした．すなわちその矢とは，まず死であり，また死すべき身体であって，主は情動を打ち払って復活したのである．8）かくして魂的なものはこのように復活し，救われるのであり，信じるものとしての霊的なものはこの魂的なもの，すなわち＜婚宴のための衣裳＞(ﾏﾀｲ22,12)としての霊魂にまさって救われるのである．

62.1）こうして魂的なキリストは創造者の右の座に坐している．それはダビデも＜わたしの右の座に坐せ＞（詩編109,1）というふうに述べている通りである．2）だがキリストは，完成のときまでそこに坐している．これは＜彼らが，自分たちの突き刺した者を見る＞（ﾖﾊﾈ19,37；ｻﾞｶﾘﾔ12,10）ためである．だが彼らが突き刺したのは，目に映った現象であり，これは魂的な部分の肉に過ぎない．と云うのも福音記者は＜彼の骨は一つも砕かれることがない＞（ﾖﾊﾈ19,36；出ｴｼﾞﾌﾟﾄ12,46；民数9,12；詩編33,21）と述べているからである．これはちょうど，アダムに関して預言が，彼の霊魂を骨とほのめかして言っていたのと同様である．3）というのも，肉において苦難を被ったキリストの霊魂は，自らを父の御手に委ねたからである．しかし骨のうちなる霊的な部分は決して委ねられることがなく，イエスは自らこれを救う．

お．終末論

63.1）かくして，霊的な諸存在の休息は主の日，すなわち第八の日（ogdoas）に行われる．この日は主の日と名づけられるが，それは母の許でのものである．彼らは霊魂を，衣として有しており，それは完成に至るまでのものである．しかるにそれ以外の信篤き諸霊魂は創造者の許で休息を得る．もっとも完成の際には，彼ら自身も第八の日へと進みゆく．2）しかる後，婚姻の宴が救われる者たちすべてに共通のものとなり，ついにはすべてが等しきものとされ互いに認識しあうに至るのである．

64）しかるに霊的な部分は，この世的なものを打ち棄てるや，花婿に付き随う母とともに霊魂に付き随い，花婿たちを，自らの天使として，「定義」の内にある閨へと連れてゆく．そして父の姿が見えるところに至るや，恣意的な世となって，配偶者としての思惟的にして永遠なる婚姻へと導くのである．

65.1）一方，宴会の＜世話役＞（ﾖﾊﾈ2,9）は，婚宴における花婿の介添人であり，＜花婿の友人は，花婿の前に立ち，花婿の声を聴くと大変喜ぶ＞（ﾖﾊﾈ3,29）．2）これこそ彼にとっての＜喜びの充溢＞であり，安らぎの充足でもある．

第４部　抜粋66－86

あ．主の教えの三段階

66）救い主は使徒たちを教えた．最初は予型論的に，また神秘的に，しかし二番目には比喩を用い，謎めかした方法で，そして三番目には，一つずつについて明らかにかつ露わな仕方で，である．

い．形状化によって男性となる女性の種子の弱さ

67.1）使徒は言う．＜かつてわれわれが肉のうちにあったとき＞（ﾛｰﾏ7,5）．それはあたかも，すでに肉体の外から語っているかのようである．そこで彼が言うには，使徒がここで「肉」と言っているのは，かの脆弱さ，すなわち上なる（anō）婦人からの出生のことである．2）また救い主が「死はいつまで続くのか」と問うサロメに対し，「婦人が出産する限りにおいて」と答えたのは（『ｽﾄﾛﾏﾃｲｽ』3,6,45,3），誕生のことを非難してこう述べたのではない．信じる者た

ちの救いのためにそれは不可欠なものであるから．3）というのもそのような誕生は，予め計られていた種子が産出されるまでは，必然的だからである．4）一方「上なる女性」ということで仄めかされているのは，形なき実体をも産み落とす創造が，彼女にとっての苦難となるわけで，その出産によって主も到来したのであるが，われわれを苦難から解き放ち，主自身のうちに入れるという目的によるものである．

68）われわれが女性だけの子である限りは，言わば恥ずべき交わりの子であるわけで，不完全かつ幼く，無思慮で弱く形を成していない．そのさまはあたかも月足らずで産み落とされた子のようなものであるが，それは一人の女性の子だからである．しかし救い主によって形成されるならば，われわれは男性の，そして花婿の子となる．

う．占星術と宿命

69.1）宿命とは，多くの互いに相反する力の集合であり，それらの諸力は目に見えず明らかでないが，星辰の運行を司り，それら星辰によって仕えられているものである．2）というのもそれらの諸力は，各々，宇宙の運動によって運ばれるものに先んじるのに従って，その傾向に沿って生まれたものに対する支配権を，いわば自らの子に対すると同じように手に入れるからである．

70.1）かくして恒星と惑星を通じ，これらに乗って運ばれている見えざる諸々の力が，誕生を管轄し見守っている．2）しかるにその星々自体は何ら為すことがなく，むしろ主たる諸々の力のエネルゲイアを明らかにする．ちょうど鳥の飛翔は，何事かを意味するものの，何も為すことがないのと同様である．

71.1）こういうわけで，黄道十二宮およびそれらに近づく七つの惑星は，昇ったり沈んだりしつつ，ある時には交わり，ある時には出会う．＜欠落あり＞．これらの星辰は，諸力によって運動し，諸動物の誕生に向かう実体の運動，および状況の転変を明らかにする．2）星辰も諸力も種々様々であり，善を為すものもあれば悪を為すものもあり，吉兆を示すものもあれば凶兆を示すものもある．それらに共通するのは，生み出されたものだという点である．それらは各々，諸力によって，固有の時機にしたがって生じる．本性に適うことが満たされれば力を持つが，それがあるものには初めに訪れ，あるものには最後に訪れる．

え．宿命を砕く救い主の誕生

72.1）このような諸力の静止と争いから，主はわれわれを守り，諸力の戦列・天使たちの戦列からの平穏をわれわれに与える．その戦列とは，ある力はわれわれに加勢して，ある力はわれわれに逆らって定められるものである．2）というのもある力は兵士にも似て，われわれの同盟者となって戦い，そのさまはあたかも神の仕え手たちのごとくであるが，ある力は盗人にも似るからである．というのも悪しき力は，王から剣を受け取って身に帯びているのではなく，狂気から自らのために略奪して佩いているからである．

73.1）対立する者たち，すなわち身体およびその外側にある事物を通じて霊魂を乗っ取り，抵当に入れて隷属させようとする者たちのために，右側にいる人々が，われわれを救い守るうえで，付き随って十分であるわけではない．2）というのも彼らは，良き牧者と同じように完全に先慮に満ちているというわけではなく，むしろその各々が，雇われ人にも似ているからである．その雇われ人とは言わば，狼が侵入してくるのを見て逃げ，自分の群れのために霊魂を捧げ尽すことに熱心でないような者である．3）それに加え，そのために闘いが行われる人間とは，脆弱な動物であって，より劣ったものへと傾き，自らを憎む者どもに加担する性向を持つ．ここから，人間には悪のほうがより多く見出されるのである．

74.1）それゆえ主は，天上界の平和を，地上に住む人々にもたらすために降った．それは使徒がこう述べるとおりである．2）＜地上には平和，いと高きところには栄光あれ＞（ルカ2,14）．そのために見慣れない珍しい星が昇り，古い星座の配置を打ち砕いた．それは新たな光を放つもので，地上の光に輝くものではなかった．新しく救いの道を拓くもの，それは主その方であった．彼こそは人々の導き手として地上に降った方である．これは，キリストに信を置く人々を，宿命から，主の先慮へと移し替えるためであった．

75.1）さて彼らが言うには，宿命とは，他の人々には，前もって予言されている事どもを示すものである．だが実証（apodeixis）そして数学による理論づけ（theōria）は明確である．2）マゴイ（占星術師）たちは，直ちにその主の星を見たばかりでなく，真に王が生まれたということを知った．そしてその王が誰の王であるかと言えば，それは神を畏れる者たちの王であるということを知ったのである．当時はただユダヤ人たちだけが，神を畏れる心をもって聞こえていた．というのもそれ故にこそ，救い主は，神を畏れる者たちの許に降

り，当時神を畏れる心の故に名声を博していた人々の許にまず，来たったのである．

お．洗礼の意味：諸力に優る力と再生

76.1）こうして救い主の誕生は，われわれを（地上的な）誕生と宿命から脱させるものとなった．ちょうどそれと同じように，主の洗礼はわれわれを火から脱させ，主の受難はわれわれを苦難から脱させた．それはすべてにおいてわれわれが主に付き随うようになるためである．2）というのも，神に向けて洗礼を授かった者は，神に向かって赴くであろうし，＜マムシや蛇らを踏みつけて歩く権能＞（ﾙｶ10,19），すなわち悪しき諸々の力に勝る権能を得たからである．3）使徒に対してはこう命じられている．＜世界を巡り，信じる者たちに対して，父と子と聖霊の名に向けて洗礼を授けよ＞（ﾏﾀｲ28,19）．4）われわれは，この父と子と聖霊に向けて再生を果たし，他のすべての力に勝るものとなるのである．

77.1）かくして洗礼は，悪しき支配の下に服していたわれわれにとっての，古き生の死と終焉であると同時に，キリストに倣った生であると言われる．その生に関しては，ただキリストその方のみが治める．2）しかるに洗礼を受けた者にとってのこの変容の力は，身体的なものではなく（なぜなら彼自身が立ち上がるのであるから），むしろ霊魂に及ぶものである．3）洗礼から立ち上がるとともに，彼は神の僕にして，不浄なる諸霊の支配者と呼ばれる．この者に対し，その諸霊はついその直前まで有効であったのが，すでに＜震撼する＞（ﾔｺﾌﾞ2,19）からである．

78.1）したがって，洗礼までの期間は，彼らが言うには，天命（heimarmenē）は真実であるが，洗礼の後には，もはや占星術師たちが真理を語ることはない．2）もっとも自由にする力を持つものは，洗いのみならず，「われわれはいかなる存在であったか」「いかなるものと成ったのか」「われわれは何処にいたのか」「何処に投げ込まれたのか」「われわれは何処に向かっているのか」「何処から贖われたのか」「誕生とは何であるか」「再生とは何であるか」に関する覚知もそうなのである．

79）彼らが言うには，種子がまだ形を与えられていない限り，それは女性の子である．だが形を与えられたならば，男性へと変えられ，花婿の息子となる．それはもはや，弱さのうちにあるのでも，世の見えるもの見えざるものの

下にあるのでもなく，むしろ男性化し，雄の果実となるのである．

80.1）母が産む者は死および世へと導かれる．しかしキリストが再生させる者は，生命へ，八日目（ogdoas）へと移される．2）彼らは世に死に，神に生きるが，それは死が死によって，腐敗が復活によって解かれるためである．3）というのも父と子と聖霊によって刻印を押された者は，他のすべての力によって支配されることがなく，それら三者の名によって，腐敗のうちにあるあらゆる三者から解放されているからである．＜彼は，土でできた者の像を担っているものの，こうして天上にある者の像を担うことになる＞（1ｺﾘﾝﾄ15,49）．

か．洗礼儀式の物質的要因を通じての聖霊の行為

81.1）炎のうちの実体的な部分はすべての実体に触れる一方，浄らかで非実体的な部分は非実体的なものに触れると言われる．それは，例えば悪霊，悪を携える天使，悪魔そのものなどである．かくして天上的および地上的な炎は，その本性に関して二通りである．その一方は思惟的，もう一方は感覚的である．2）したがって類比的に，洗礼もまた二重である．すなわち，まず水による感覚的な洗礼があり，これは感覚的な炎を消し止めるものである．もう一方は霊による思惟的な洗礼であり，こちらは思惟的な炎の治療薬である．3）そして実体的な霊は，わずかであれば感覚的な炎を育むものにして刺激物となるが，その量が増すならば消し止めるものとなる性質を有する．しかるに，天上界よりわれわれに与えられた霊は非実体的であり，物質的な事物ばかりでなく，もろもろの悪しき力や支配者を制圧する．

82.1）そしてパンとオリーブが，神の名の力によって聖化される．そこで受け取られるものは，見た目によるものと同一のものである．ただし力によって，霊的な力へと変容せられている．2）こうして水についても同様のことが行われ，誓約を受けるとともに洗礼のためのものとなり，悪しきものを遠ざけるだけでなく，聖化の力を加えて受け取るのである．

き．洗礼の徴と，諸力の至高の争い

83）人々は喜びのうちに洗礼へと赴くことが相応しい．しかし往々にしてある人々には不浄な諸霊が降下することがあり，それらが徴を受けた人にたまたま付随すると，それ以降，癒されぬものとなり，喜びとともに恐れが織りな

される．それはただ恐れのみが，浄らかなものとして到来せんがためである．

84）それ故，断食，懇願，祈り，手を挙げること，膝をかがめることは，霊魂が世と「獅子の口」（詩編21,22）から救われるためである．それ故にこそ，霊魂がそこから引き離された諸霊が憤慨するとき，直ちに試みが起こるのである．たとえ人がそれを予知して耐えようとも，諸霊が外界にある事物を揺さぶるのである．

85.1）主は洗礼の後，直ちにわれわれの場所へと移り住み，まずは荒れ野にあって＜野獣たちとともに＞（ﾏﾀｲ4,1－11）あり，しかる後これらの野獣とその支配者を手なずけた．その様は，すでに真なる王であるかのようであった．そして早くも天使たちによって仕えられた．2）というのも，肉において天使たちを治める者は，すでに天使たちを隷属させて当然だからである．3）かくして，傷を受けることのない肉体と霊魂を有する者たちは，主の武具によって武装すべきなのであり，使徒が述べているように，その武具とは＜悪魔の放つ火の矢を悉く消すことのできる＞ものなのである．

86.1）差し出された貨幣を見て，主は，それが誰の所有物であるかとは問わず，むしろ＜この像と銘は誰のものか＞と尋ねた（ﾏﾀｲ22,20以下）．答は＜皇帝のもの＞であった．この問いは，その像と銘の主である者にその貨幣が与えられるようにするためであった．2）信徒も同様である．彼はキリストを通して，神の名を銘として，神の霊を像として有している．また理性を欠く動物は，目印を通じて，各々誰の所有物であるかを示しており，その目印を通じてその所有の正当性が明らかにされる．これと同じように，信篤き霊魂もまた，真理の印を受け取るとともに＜キリストの刻印＞（ｶﾞﾗﾃﾔ6,17）を身に帯びているのである．3）これらの者たちは＜すでに寝床に入って休んでいる子供たち＞（ﾙｶ11,7）であり＜賢いおとめたち＞（ﾏﾀｲ25,1）であって，遅れたその他のおとめたちは，この賢い彼女たちとともに＜用意された良き事ども＞に与かることはできない．その良き事どもとは，天使たちが覗き見たいと熱望しているものである（1ｺﾘﾝﾄ2,9；1ﾍﾟﾄﾛ1,12）．

注

1　「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）―全訳―」，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』57, 1－82, 2010.3.「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』（『訓導者』）第１巻―全訳―」，同『文藝篇』59, 1－62, 2011.3；「同　第２巻―全訳―」，同『言語篇』59, 1－74, 2011.3；「同　第３巻―全訳

—」，筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25－76, 2011.3.　「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』) 第1巻—全訳—」,『文藝言語研究　文藝篇』63, 63－163, 2013.3；「同　第2巻—全訳—」，同『言語篇』63, 147－223, 2013.3；「同　第3巻—全訳—」,『古典古代学』第5号, 27－93, 2013.3；「同　第4巻—全訳—」,『文藝言語研究　文藝篇』65, 77－158, 2014.3；「同　第5巻—全訳—」【改訂版】，同『言語篇』66, 57－148, 2014.10；「同　第6巻—全訳—」，同『言語篇』65, 41－136, 2014.3；「同　第7巻—全訳—」,『古典古代学』第6号, 35－113, 2014.3；「同　第8巻—全訳—」,『文藝言語研究　文藝篇』66, 87－115, 2014.10.　「アレクサンドリアのクレメンス『救われる富者とは誰であるか』—全訳—」【改訂版】，同『文藝篇』67, 51－87, 2015.3.

2　①『ヒュポテュポーセイス』(「概要」)，および②『過越について』，③『教会規定あるいはユダヤ主義者論駁』，④『摂理について』，⑤『忍耐への勧告あるいは新しい受洗者に』，⑥『書簡』，そして⑦「典拠不明断片」が伝えられており，これらについても「アレクサンドリアのクレメンス「断片集」」という標題のもと，本学紀要に訳出する予定である.

3　「アレクサンドリアのクレメンス『預言書撰文集』—全訳—」,『文藝言語研究』68, 2015.10に掲載予定.

4　主なものとして，A. Orbe, s.j., *Cristología gnóstica : Introducción a la soteriología de los siglos II y III,* 2 vols., Madrid 1976を挙げておく．日本人研究者によるハンディなものとして，筒井賢治『グノーシス　古代キリスト教の＜異端思想＞』，講談社選書メチエ313，2004年がある.